別紙２

# 平成２６年度大学コンソーシアムとちぎ　学生活動支援事業　報告書

| | |
|---|---|
| 機　関　名 | 宇都宮共和大学 |
| 団体等名 | 松田ゼミナール |
| 学生代表者氏名<br>(所属・学年) | 姜（かん）　玟求（みんぐ）（シティライフ学部・２年） |
| 責任教職員氏名 | 松田さおり　専任講師 |

| | |
|---|---|
| １．事業名 | 映画館の動向と宇都宮中心市街地の役割変化についての比較研究 |
| ２．実施時期 | 2014年7月～2015年3月 |
| ３．実施場所 | 宇都宮市内および東京都内 |
| ４．事業の内容等 | 関東地方では、中心市街地における映画館の長期的な減少の一方、郊外型シネコンの展開がみられる。このような映画館の郊外流出は、中心市街地の多機能性の低下につながることが推測される。そうした傾向の一方で、市街地に残るミニシアター／名画座では、独自の映画鑑賞機会増加への試みが行われている。これらを踏まえ、関東地方に立地する映画館の立地傾向から、中心市街地の機能変化について、特に関東全域と栃木県の比較調査することを目的に事業を実施した。<br>具体的な調査内容は、次の二つであった。①映画館の立地動向の変化から中心市街地の機能変化について明らかするとともに、近年閉館の続くミニシアター、名画座のあり方や、郊外型シネマ・コンプレックス（シネコン）の影響について検討した。②関東地方における映画館の現状とその役割について探るため、「新橋文化・ロマン劇場」、「宇都宮ヒカリ座」での観察調査を行った。<br>さらに多様かつ公共的な機能を持つ施設としての映画館の役割について実践的にとらえるため、大学祭での上映会を計画・実施した。 |
| ５．事業の成果と今後の課題 | (1) 事業の成果<br>調査研究の成果については、研究代表者姜玟求により研究ノートとして「関東地方における映画館の動向とミニシアター/名画座のフィールドワーク」（松田さおりと共著、『宇都宮共和大学都市経済研究年報』14：127-135，http://ci.nii.ac.jp/naid/110009841920，2015.3.9 現在）に発表した。<br>同研究ノートでは、関東地方全体および栃木県の映画館データに関する文献から、1960 年初頭から長期的衰退傾向にあった映画館が、1990 年代後半より外資系興行会社ならびに国内大手興行会社によるシネコンの展開により歯止めがかかったこと。ただしそうしたシネコンの展開はショッピングモールなどの郊外型大規模商業施設に併設される形で拡大したために、都市の繁華街や駅前商店街などが、都市の中心地から郊外への流出し、娯楽機能や中心市街地の多機能性の低下につながったことを示した。その一方で先行研究の知見と、本研究で行った宇都宮市内および東京・新橋の名画座のフィー |

| | |
|---|---|
| | ルドワークから、中心市街地の映画館には娯楽性のみならず、文化的な体験の共有、世代の異なる人と人との交流といった、ある種の公共性の創出機能が認められることが確かめられた。<br>　さらにこのような映画館の有する公共性創出機能を実践する試みとして、2014年11月1日（土）宇都宮共和大学大学祭において、本調査研究の趣旨や概要について発表すると共に、映画「ローマの休日」「みんなのアイドル　ベティちゃん」を、宇都宮市立視聴覚ライブラリーから貸与して頂き、「共和大タクミ座」と題した上映会を開催した。<br>　⑵ **今後の課題**<br>　調査研究については、今後も中心市街地における映画館の現況について継続調査し、加えて今回扱えなかった地域における映画館の社会史的側面や、郊外型シネコンの機能についても、公共性の創造という観点から探索していきたい。<br>　上映会については、学外での宣伝活動が不十分であったため、来場者が11名とふるわなかった。次回は、催しの目的を明確にするとともに、内容を充実させ、さらに会場に入ってもらうための何らかの「仕掛け」についても考える必要がある。 |

（注）１．記述が枠内に収まらない場合は、枠を拡大してください。
　　　２．事業内容がわかるような資料や写真などがあれば添付してください。
　　　　　報告書（添付書類を含む）はＡ４判５枚以内にまとめてください。
　　　３．この報告書は、各関係機関等に公表するともに、大学コンソーシアムとちぎのホームページへの掲載を考えております。また、次年度以降の学生活動支援事業に役立てていきたいと思います。

新橋ロマン劇場

新橋文化劇場

宇都宮ヒカリ座

上映会の様子